

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

# 本学特別強化指定クラブ「女子駅伝部」の創部から 4年間の成果検証：チーム成績、学業生活との両 立、学内外への貢献の観点から

著者	山本 泰明
雑誌名	研究論集
巻	107
ページ	235-244
発行年	2018-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1443/00007798/">http://id.nii.ac.jp/1443/00007798/</a>

# 本学特別強化指定クラブ「女子駅伝部」の創部から4年間の成果検証

— チーム成績、学業生活との両立、学内外への貢献の観点から —

## 山 本 泰 明

### 要 旨

本学女子駅伝部は、特別強化指定クラブとして2013年4月に創部され、4年間が経過した。チーム成績は4年間右肩上がりで見上げてきたが、これから上位の常連校に挑んでいく正念場となる。大学女子駅伝界全体が盛り上がり、本学女子駅伝部としても協力的に活動していきたい。学業生活との両立という点では、語学力を伸ばしたいという本学にふさわしい人物が入部しており、在学中に留学を経験する部員も半数以上いて、就職活動も含めて、部活動と両立しながら日々奮闘している。また、私立大学としての使命を果たすという意味で、地域貢献活動の幅を広げている段階である。自分たちの活動をFacebookで積極的に情報発信し、学内外に開かれた存在を目指している。女子駅伝部が存在することで、大学、地域、社会が少しでも元気になっていくように、そのことが学生の成長の場につながっていくように、さらに活動を発展させていきたい。

キーワード：特別強化指定クラブ、女子駅伝部、学業生活との両立、地域貢献活動、学内外への広報

### 1. 創部の経緯

特定のスポーツ系の部活動を重点的に強化する大学は、特に私立大学において多い。その目的は、大学の広報的なものであったり、大学の関係者（在学生、卒業生、教職員など）の一体感の醸成であったりする。その点においては、企業が高いスポーツ実績を持つ人物を社員として雇用し、採用後もそのスポーツ活動を継続支援する企業スポーツと共通している。

本学でも、上記の目的でスポーツを強化することになり、数あるスポーツ競技の中から女子駅伝が選ばれ、縁あって私が監督を引き受けることになった。2012年4月に着任し、1年間の準備期間を経て、2013年4月に本学女子駅伝部は創部された。初年度は1年生のみ4名の部員でスタートし、その後毎年新入部員を受け入れ、4年目に初めて4学年16名がそろい、チームの基本体制ができた。このタイミングをひとつの節目の時期ととらえ、ここでこれまでの4年間の歩みを振り返り、次の展開を検討する材料としたい。

## 2. チーム成績の観点から

### 2-1. 本学のチーム成績の推移

創部からの4年間の部員数と主な成績の推移を表1に示す。

表1. 各年度の主な駅伝大会での成績

年度 (創部)	部員数	関西学生対校女子駅伝 6区間30.0km	全日本大学女子駅伝 6区間38.0km	全日本大学女子選抜駅伝 7区間 43.4km
2013 (1年目)	4人	17位 1時間56分03秒 (1位タイム差16分00秒)	不出場	不出場
2014 (2年目)	8人	6位 1時間44分32秒 (1位タイム差 5分46秒)	21位 2時間14分03秒 (8位タイム差 5分47秒)	不出場
2015 (3年目)	13人	6位 1時間43分32秒 (1位タイム差 2分42秒)	13位 2時間10分23秒 (8位タイム差 2分30秒)	13位 2時間29分42秒 (8位タイム差 2分30秒)
2016 (4年目)	16人	5位 1時間41分50秒 (1位タイム差 2分29秒)	13位 2時間08分53秒 (8位タイム差 1分19秒)	13位 2時間31分30秒 (2016年のみ43.8km) (8位タイム差1分14秒)

1年目は、部員数が駅伝の区間数に2名不足していたので、女子駅伝部以外の学生（陸上競技部の競歩選手、マネージャー）に協力してもらい、駅伝に初出場した。

2年目は、部員8名ながら関西予選を突破し、全日本大学女子駅伝に初出場した。私の想定より1年早い出場であった。当時は、関西地区から出場できる学校数が現在より1校多かったことと、女子駅伝を強化している関西地区の大学が今よりまだ少なかったことに救われた。

3年目は、初めて全日本大学女子駅伝と全日本大学女子選抜駅伝の両方の全日本レベルの大学女子駅伝に出場し、全日本大学女子駅伝では初出場時よりも順位を上げた。

4年目は、上記の両大会に連続出場した。順位としては、両大会とも前年に引き続き13位、全日本レベルの駅伝としては4大会連続13位となった。

4年間の各駅伝の総合タイムに着目すると、関西では1位チームとの差が、全日本では当面の目標である8位とのタイム差が、年々少しずつ短縮されてきたことがわかる。

タイムは気象条件が大きく影響し、またコース自体の変更も随時あるので単純な比較はできないが、この4年間の順位とタイムを総合的に考えると、チーム成績は創部以降、上昇傾向でここまできているといえる。今後も成績の上昇を目指していきたいが、これからの上昇はこれまでより難しい領域になっていくことは確実である。

## 2-2. 他大学の成績との比較

他大学と比較して検討するために、直近の2016年に開催された第34回全日本大学女子駅伝の総合結果を表2に示す。2016年は、松山大学が立命館大学の6連覇を阻み、創部9年目にして初優勝を果たした。

表2. 2016年度 第34回全日本大学女子駅伝の総合成績

順位	チーム名	通算 出場 回数	総合タイム	順位	チーム名	通算 出場 回数	総合タイム
1	松山大学	9	2時間03分56秒	14	白鷗大学	21	2時間09分16秒
2	立命館大学	27	2時間05分07秒	15	順天堂大学	24	2時間09分29秒
3	名城大学	18	2時間05分38秒	16	中央大学	26	2時間09分44秒
4	京都産業大学	23	2時間06分07秒	17	鹿屋体育大学	13	2時間10分10秒
5	大東文化大学	6	2時間06分12秒	18	東北福祉大学	14	2時間10分14秒
6	大阪学院大学	23	2時間06分18秒	19	大阪芸術大学	4	2時間10分24秒
7	日本体育大学	28	2時間06分50秒	20	中京大学	32	2時間13分20秒
8	東洋大学	4	2時間07分34秒	21	石巻専修大学	2	2時間15分30秒
9	関西大学	9	2時間07分37秒	22	環太平洋大学	1	2時間15分54秒
10	福岡大学	28	2時間07分45秒	23	活水女子大学	1	2時間17分13秒
11	東京農業大学	24	2時間08分19秒	24	新潟医療福祉大学	5	2時間17分46秒
12	城西大学	23	2時間08分48秒	25	北翔大学	14	2時間21分42秒
13	<b>関西外国語大学</b>	<b>3</b>	<b>2時間08分53秒</b>				

通算34回を数える全日本大学女子駅伝で、立命館大学が最多10回の優勝を果たしている。その10回も、2003年に初優勝して以降の13年間で10回ということで、ここ最近に集中している。次に優勝が多いのは、京都産業大学の4回（1994-1997の4連覇）である。また、それより歴史が浅い全日本大学女子選抜駅伝では、大会史11回中、立命館大学が10回の優勝を果たしている。

両大会の全体的な傾向をみると、以前は優勝する大学が比較的分散していたが、2003年に立命館大学が初優勝した後は、立命館大学を中心に毎年のレースが展開されているといえる。

また、2016年度全日本大学女子駅伝出場25校のうち、前年からの連続出場が21校、本学の出場回数（3回）より多くの頻度で出場している大学が21校である。つまり、多くの大学が連続出場を長く続けている常連校であり、そのような安定した常連校に対して、本学を含む新興チームが挑んでいくという構図になっている。2016年はそれを象徴するように、松山大学が9回目の出場場で初優勝し、出場回数が二桁に満たない大東文化大学や東洋大学が伝統ある常連校に食い込んで8位以内に入賞している。本学もその新興チームの1校として、今後は上位の常連校に食い込んでいくことが目標になる。一方、本学の創部よりも後から新しく強化を始めているチームも少なくなく、本学の今の立ち位置も決して安泰のものではない。

強化に力を入れる大学が増えることは、大学女子駅伝全体としてはたいへん好ましい傾向である。大学女子駅伝界が盛り上がっていくことで、大学でも女子駅伝をやってみたいと思う高校生が増えることを期待したい。男子の大学駅伝では、箱根駅伝が過熱といわれる程に盛り上がり、そのことが競技人口の増大と競技レベルの向上に寄与している。それに比べると、女子の大学駅伝は、その盛り上がりがまだまだ少なく、競技人口も男子に比べると極端に少ない。例えば、コース全長距離を長くする、区間の数を多くする、大会の開催時期を変えるなどの工夫をして、走る人（大学生）、見る人（選手関係者、大学関係者、一般の市民）、支える人（スポンサー企業、メディア、審判、学連、陸上競技協会）など、皆が一段とワクワクするスポーツイベントへと発展していくことを願う。箱根駅伝に学びつつ、女子駅伝ならではの華やかさを活かした大学女子駅伝界全体の発展に、本学女子駅伝部としても協力していきたい。その中で、全国大会へ連続出場すること、次の段階として上位入賞、そして機が熟した時には優勝を目指せるようにチーム運営をしていきたい。

### 3. 学業生活との両立の観点から

#### 3-1. 授業との両立

当然のことながら、部員には文武両道を求めている。部員たちのほとんどは、特別入試（スポーツ推薦入試）を経て入学するが、入部の勧誘をする際には、本学は外国語（英語、中国語）の習得等のために求められる学習量が非常に多く、その意欲が高いことが入学と入部の条件であることを強調して説明している。そして入学後は、なるべく他の学生と同様の学習環境を確保できるよう、競技一辺倒にならないように配慮している。

特に1、2年生時は、英語、中国語の授業を中心としてコマ数が多い時間割が組まれる。授業で出される課題も多く、特に授業学期期間はたいへん忙しい毎日を過ごしている。大学には、他のクラブも含めて特別入試で入学する1年生向けに、5時間目や土曜日に授業が入らない特別入試入学者用の英語クラスが設定されているが、女子駅伝部員の最近の入部生は全員、他の入学生と同様の習熟度クラスで学ぶことを希望し、そちらで学んでいる。過去には特別入試入学者用の英語クラスで学んだ部員もいたが、習熟度クラスで学ぶ部員のほうが多様なたくさんの学生と関わる機会が増えて友人の輪も広がり、勉学への意欲も高まり、満足度も高い。

しかしその分、16時40分から18時10分に設定されている5時間目と土曜日1、2時間目に授業が入ることが多くなる。表3に、ある1年生の2017年度春学期の時間割を示す。平日の5時間目と土曜日に、授業が多く入っている。2017年度の1年生5名の場合、全員が春・秋学期とも5時間目に授業が入る平日があり、土曜日1、2時間目は、春学期は全員、秋学期は1名以外の4名に授業が入っている。その場合、平日はチームとしての練習時間と、土曜日は大会出

表3. ある1年生の2017年度春学期の時間割表

	月	火	水	木	金	土
1		Speak & Listen	国際関係論	Critical Wri I	Read and Trans I	データ分析
2	ESP I	Critical Wri I		経済分析	情報処理演習	基礎中国語
3	中国語会話 I	Read and Trans I	Gra in Use I	中国語会話 I	Speak & Listen	
4			基礎中国語		フレマンセミナー	
5	教職概論	経済分析		国際関係論	教育心理学	

場と重なることになる。授業学期期間中の平日は、チーム全体練習の開始を4時間目終了後の17時10分と設定しているため、5時間目のある部員は5時間目終了後の18時10分以降にグラウンドに移動して更衣し、個別で練習することになる。しかし、夕食時間が19時30分と固定されているため、5時間目終了後に練習できる時間は1時間に満たず、本格的な練習はできない。それを補うために、早朝や授業の合間の時間などを有効に使うように勧めているが、授業の課題に取り組む時間も多く必要で、学生の生活スケジュールにあまり余裕はない。

一方、土曜日の場合、大会の開催日や移動日と重なることが多くなる。土曜日に授業のある学生の場合は、大会と重なるときは基本的には授業優先とし、日曜開催の大会に絞って出場することで対応している。重要な公式大会の場合には、学内規程による公欠制度を利用して対応しているが、土曜日に授業が入りやすい1、2年生は、授業出席を優先して大会出場を見送るケースは少なくない。この点に関しては本学に限った話ではなく、例えば2017年関西学生アメリカンフットボールリーグ3部において、公式戦が土曜日に連続して設定されている中、大阪芸術大学は土曜日授業への出席を優先し、リーグ戦5試合中の2試合を棄権として対応する判断をしたことが話題になった。また、硬式野球の平日開催も、これまでたびたび問題提起されてきた。学業優先は大学スポーツのあるべき姿であるという理念には概ね共通理解を得られているが、試合会場、試合日数の確保など現実との兼ね合いの中で、学生も競技連盟も、学業との両立の狭間で苦労しながらやりくりしている。

授業学期期間中はそういった毎日が続き、部員たちは慢性的に疲労を抱えながら過ごしているように見える。したがって、授業学期期間中は練習時間が多くならないように調整し、なるべく睡眠時間を確保できるように配慮している。

チームの学習風土を高めるためのその他の活動として、普段は早朝練習をしている6時から7時30分の時間帯に、早朝学習タイムを週1回設定し、その日の朝は寮内の共通の場所に皆が集まって各自の学習課題に取り組むようにしている。また合宿遠征時にも、毎日最低1時間、

集まって各自の学習をする学習コアタイムを設けている。

また、定期的に行われる英語の検定試験を受験することを推奨している。創部からしばらくは、勧めても受験する者がなかなか増えなかったが、就職を意識する学年の部員が増えてきた。ここ2年くらいは受験意識が高まり、全体的に受験頻度が多くなってきた。図1に、一人あたりのTOEICの受験回数の推移を示す。全体として、直近の年度での受験回数が多くなっている。また、それぞれの学年集

団ごとの年度別の推移をみても、学年が進むたびに受験回数が増えるようになった。その影響からか、2017年度入学生は、1年生の時にも積極的に受験するようになってきた。学内TOEICは基本的に土曜日実施のため、公式大会の出場と重なるケースも多く、受験頻度が制限される側面もある。このような受験頻度の増加に伴って試験の点数も確実に上がってきて

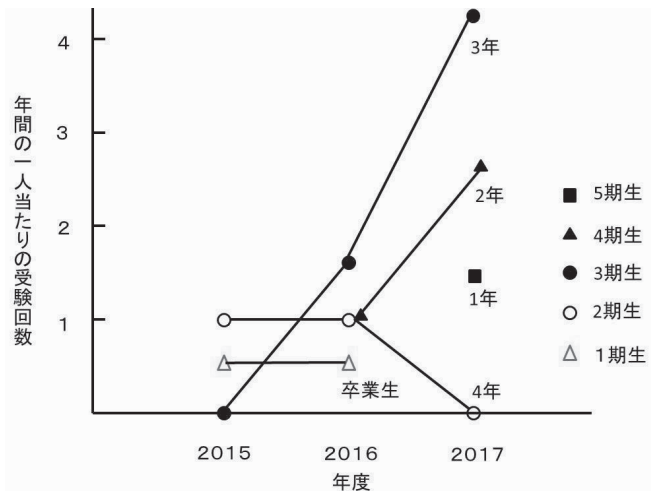


図1. TOEIC 受験頻度の推移

いて、複数名がTOEICで790点台まで乗せてきた。

このように学習に対して前向きに取り組む風土が定着しつつあるので、授業の単位を落とすことを心配しなければならない部員はいない。本学で学ぶからには、外国語大学卒業にふさわしい英語力また中国語力を身につけて卒業し、それを活かして社会で活躍してほしいと願う。

### 3-2. 留学希望の容認

本学は外国語大学であり、留学する学生が非常に多い。独立行政法人日本学生支援機構 JASSO の「協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果（平成27年度版）」によると、日本人学生留学派遣者数は、本学が国内の大学で最も多い。そういった特色が本学にはあるので、創部当初から、留学に行きたい希望を持つくらいの人物が本学女子駅伝部にふさわしいと考えて勧誘活動を行ってきた。

女子駅伝部員が所属する英語国際学部の学生は全員、カリキュラムとして、2年生時に半学期間、もしくは春と秋の両学期間、英語圏および中国語圏に留学することが基本となっている。一方、特別入試の募集要項では、女子駅伝部員は原則留学に行かないということになっているが、本人が強く希望していて学習状況に問題ないのであれば留学に行ける道が残してある。実



際、カリキュラム上の留学と、春休みの1ヶ月程度の短期留学、1ヶ月程度の海外インターンシップ含めると、2016年時の在籍部員16名のうち、9名が在学中に何らかの海外経験をしている。留学中は部活動から離れるので、短期的には競技としてマイナスだが、留学によって確実に語学力が伸び、勉学への意欲が高まり、そして人間的に大きく成長することを考えると、長期的には本人としても女子駅伝部としても大きなプラスがあると考えている。帰国後の競技への意欲は高く、その取り組み姿勢は他のチームメイトを大いに刺激する。強化指定クラブでも留学が可能であるということを、本学女子駅伝部の特色のひとつとして継続していきたい。

### 3-3. 就職活動との両立

就職活動に対しては、早いうちから高く意識づけるように促している。部員たちは、下級生の時から、学内で開催される就職ガイダンスに自ら進んで積極的に参加している。また、インターンシップに参加することも促しており、3年生の頃から参加希望を申し出てくるケースが多く、基本的には希望を認めている。

部員たちは、これまでの学校生活において、部活動で頑張ることを生活の優先事項として打ち込んできた。その成果は学校生活の中では評価されるものだったかもしれないが、大学卒業後は、実業団選手になるごく一部の者以外は、大学卒業の段階で他の分野で人生を切り開いていかなければならない。もちろん、部活動で培われた力は、他の分野でも活かすことができる。しかし、その変換は意識的にしなければならず、その変換に苦勞する者は少なくない。明確な意識改革が不可欠である。したがって、就職活動については積極的に後押しし、学業との両立と同様、就職活動と競技も高いレベルで両立することを部員には求めている。

## 4. 学内外への貢献の観点から

### 4-1. 地域貢献活動

公益法人としての私立大学である本学は、公益性を果たす使命がある。女子駅伝部としても、地域貢献の活動を通してその責を果たせるよう努めている。

2015年度から、1～2月頃に大学周辺の3つの小学校に部員が出向き、持久走の体育授業に参加し、小学生に持久走を指導する機会を持っている。このような機会を持ちたいという私たちの提案が小学校側のニーズとマッチした形であり、2016年度も引き続き実施した。今後も少しずつ機会と学校数を増やして継続していきたいと考える。

加えて、同じく2015年度から、京都府の久御山町体育協会から依頼を受け、1月下旬のくみやまマラソンに合わせたタイミングで、4回のジョギング教室において部員が講師を務めている。参加者は小学生から年配者まで幅広く、いくつかのグループに分かれて指導を行っている。



2016年度も依頼があって実施された。今後も引き続き依頼してもらえるように指導内容を工夫していきたい。

さらに、同じく2015年度から、年2回の枚方市陸上競技大会、年1回の枚方市小学生陸上で、依頼を受ける形で審判と運営の協力をしている。部員は、普段は大会に競技者として参加するが、その裏側の仕事を体験することは、競技者としても大きなプラスになる。2016年度も引き受けており、今後も継続していきたい。

いずれの活動も、部員にとって自信のある長距離走を通して、子どもたちから年配までの多世代のたくさんの方々とは接することができる、部員にとってたいへん貴重な機会である。大学の外でのこれらの機会を通して部員たちが学ぶことは多く、重要な成長の機会になっている。これらの活動を今後も発展的に継続していきたい。

また、部員たちが大学周辺を走っていると、地域の方々といさつを交わす機会が多い。キャンパス周辺の農家の方から野菜をいただくこともあるという。学研都市キャンパス周辺の住民の年齢層は高めであり、若い世代である学生たちの活気が何らかの刺激になっているものと思われる。部員たちの頑張る姿勢が、周辺地域の方々との良い関係を築くことに少なからず貢献しているのは間違いない。また、そうやって周囲からも常に見られていることを意識することが、学生たちに自覚と誇りと責任を促す契機になっているのも確かである。

今はどちらかというと依頼に応える形での活動が主であるが、今後は部員たちが主体的に企画、運営をして活動していく機会を増やしたい。部活動が、部員にとって幅広い分野での学び、成長の場になるように願う。

#### 4-2. 学外への広報

創部にあたって、部のホームページを制作した。またそれと連動する形で、Facebook によるチーム活動の情報発信をスタートした。Facebook では、大会への出場、結果の情報を中心として、タイムリーに情報発信することを心がけており、その取り組みは創部から現在まで継続して実施している。Facebook の大きな目的は、遠方に住んでいる部員の家族、出身地の応援者に対する活動状況の報告と、未来の新入部員に向けた情報発信である。部員の家族や出身地の関係の方々との閲覧が多いことと、近年の新入部員は入部前からこの Facebook を積極的に閲覧していることを確認している。現在は、数名の部員が Facebook への投稿の役割を担い、役割分担をしながら計画的に記事投稿をしている。

表4に、Facebookの年間リーチ数（閲

表4. Facebook 各指標の推移

	投稿総数	年間リーチ 総数	「いいね」総数	1投稿あたりの 平均「いいね」数
2013 (2013.2-2014.1)	153	38639	3999	26.1
2014 (2014.2-2015.1)	159	107094	8160	51.3
2015 (2015.2-2016.1)	192	348845	10976	57.2
2016 (2016.2-2017.1)	164	303246	11387	69.4

覧者数に相当)の総数と、「いいね」ボタンを押してくれた人(記事に積極的関心を持ってくれた人ととらえる)の総数を示す。創部1年目と比較し、4年目のリーチ総数は約8倍に、「いいね」総数は約3倍に増えた。

図2には、1投稿あたりの「いいね」の平均数の推移を示した。表3で「いいね」

総数をみると、2015、2016年度のここ2年ではその大きな増加はないが、投稿総数で割った1投稿あたりの数でみると、ここ2年において大きく増加していることがわかる。外に向かってオープンな組織であるために、このFacebookの活動をさらに継続推進していきたい。

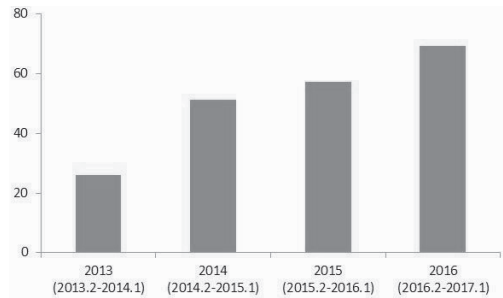


図2. 1投稿あたりの平均「いいね」数

#### 4-3. 学内への広報

女子駅伝部の活動が4年を経過した中で、学内での関心、特に在学生の関心が低いと感じる。これは女子駅伝部の活動にだけ関心がないというわけではなく、在学生在が、自分や自分の知り合い以外の関西外大生がどのような分野、機会でどのように頑張っているのか、というような横に対する関心が総じて低いと感じる。これは、約17万人いる本学卒業生の母校への愛着という縦のつながりの濃淡にも関係していると感じる。

在在学生にとっての健全な身近のモチベーションは、周囲の誰かの頑張りを見て、よし自分も頑張ろうと思うようになる、横の関係性であろう。また、卒業生との関係という点でも、卒業生が社会で活躍している姿に憧れて在学生在が頑張ったり、在学生の頑張りを見て卒業生が自分の原点を見直して頑張ろうと思ったり、ということが、好ましい縦の関係性であろう。そういった横、縦の関係性がいよいよ深まっていくように、卒業生までを含めた学内の広報活動、交流機会をもっと増やすことが必要であり、そのことに女子駅伝部としても貢献していきたいと考える。

女子駅伝部の規約には、部の存在価値のひとつとして、大学関係者、地域の方々に明るい話題を提供することがあると定めた。女子駅伝部の頑張りで、大学や地域が元気になったり、一体感を持ったたりすることのきっかけになれば、これほどうれしいことはない。

女子駅伝部への関心が、大会成績のみに限ってしまうのはもったいない。大会成績よりも、普段の練習の取り組みの様子こそ、最も見る価値があると感じている。部員たちが日々練習に必死に取り組む姿には、間違いなく人を魅了する力がある。2018年度から、現在のキャンパスが閉鎖されて新設の御殿山キャンパスに移転することになり、今の練習場である学内400mトラックが閉鎖されるのが大きな懸念材料だが、これまでの練習場は練習の様子が見えにくい立

地だったことを考慮して、この移転を契機に、普段の練習を見てもらう機会を増やすようにしたいと考えている。部員も、練習風景を見られることをプラスの緊張感にしていけるといい。

また、このキャンパス移転を契機に、チームとして学内でのボランティア的な活動を広げることを進めていきたい。教職員向けのランニング教室や、在学生、留学生を対象にした駅伝といったイベントを企画、運営することを実践していきたい。

## 5. 総括

全体として、創部以来の4年間で本学女子駅伝部が果たしてきた成果は少なくないが、未成熟なものも多く、長期的視点で見るとまだまだ発展途上である。女子駅伝部があることで、大学（在学生、卒業生、教職員）が、地域が、社会が少しでも元気になるよう、感謝の気持ちを持ちながら、活動を発展させていきたい。

チームを創部する際に作成した規約で、チームで共有する価値観を「自立」と「協同」とした。自立した人物、チームへと仲間同士で協力しながら成長していくことと、チームとしての高い競技レベルで活動することを両立できるように促しながら、部員が生き生きと活動できる環境へとさらに整備を進めていきたい。

## 文 献

杉山茂 岡崎満義 上柿和生編『箱根駅伝の正体を探る』創文企画、2016年。

武田一「大学駅伝プロジェクトの取り組み（新チームの発足）」『桜美林論考』6号、2015年、15-28頁。

武田一「本学駅伝プロジェクトについての研究（第1報）」『桜美林論考』7号、2016年、61-72頁。

（やまもと・やすあき 英語キャリア学部准教授）